

愛しき想いはかくばかり

かれ一ぱすた

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

女子高生の結月ゆかりと国語教師の水奈瀬コウの他愛もないラブコメです

文章量自体は短編レベルですが、一応前後編に分けております

後編 前編

目次

5

1

前編

「不完全変態って痴漢しようと思ったけど結局決心が付かない中途半端なおじさんみたいじゃないですか?」

「僕は個人面談で対面の女子高生が中学男子並みの発言をしていて頭を抱えているよ。」



「そもそも僕は国語の教師です。」

「そういつた発言はせめて生物の教師にしないかな?」

「ほら、あれですよ。ウチの高校って生物の教師は女性しかいないじゃないですか。」

「そうだね。」

「そういうことです。」

「ん?」

「はい?」

国語教師・水奈瀬コウは困ったように……いや実際困って眼鏡を外して目頭を抑える。

「セクシャルハラスメントって言葉がありました。」

「驚きました。国語教師なのに横文字を使うんですね。」

「君の中の国語教師像はどうなってるんですかね結月さん。」

「それは勿論敬愛する素晴らしい先生方の一人である水奈瀬先生の顔が鮮明に……」

「その良く回る口を授業の朗読で活かしてくれると非常に助かるんですけどね。」

「例えば、結月ゆかりという生徒との面談はこれが2回目であることをコウは思い出す。」

1 回目は人生ゲームを持ち出してきたので付き合っていたら日が暮れた上に呼び出され、月収が見事に減った。クビにならないだけマシか。

さて、そんな彼女だが、現在進行形で改造制服を着こなし、面談など最初からする気が無いだろうというほどの不真面目な態度である。

しかし成績は憎たらしいほどに優秀で、教師たちも手を焼いていた。

その為彼女が2年になると、何かと人付き合いが良く、『使い勝手がよい教師』のコウのクラスに回されたのである。

「今日は君の面談時間をわざと最後に持つてきたからね。夜が明けるまで付き合おうよ。」

仮の進路をそろそろ聞いておかないと僕の教師としての評価に関わってくるからね。」

「では夜が明けるまで人生ゲームします？」

「夜が明けるまでというのは例えだと言う事に気づいてほしかったかな。」

「おつ、今の国語の教師っぽかったですね！」

「国語の教師ですからね。」

ゆかりは椅子の背もたれに身を投げ出して、「でもですね〜」と前置きを入れると。

「進路……って言われても困るんですよね。」

「いまいちイメージが湧かないというか。」

「まあ、そういう子は多いよ。」

具体的な将来のイメージが湧かないって子は多いからね。」

「……うーん。多分ちよつとコウ先生の考えてる事とは違うと思うんですよ。」

「というと？」

「ほら、私って超優秀じゃないですか。」

「強く否定が出来ないくらい憎たらしいほどにね。」

「だから自分がどんな職に就けるかとかは大体想像がつくんですよ。」

「一応興味がある職についてもそこそこ調べてますし。」

「お、偉いじゃないか。」

ゆかりは机の上にバツと資料を投げ出す。

そのどれもがしっかりと要点が纏まっており、普段の態度からは一転して真面目な印象を受ける。

「ですが、私が『大人』でいるイメージは湧かないんです。」

私は、まだちっぽけな子供です。

『今から大人になりますよ』なんて線引きは20歳という曖昧なラインしか無いんです。

大学を出て、就職して、それで私は大人になれるのでしょうか。

……ただ騒いでるだけの小さな子供は大人という蝶に羽化出来ないんじゃないかって時々思うんです。」

「……なるほど。」

「私は、子供です。いつまでも子供のままで、大人になる為のサナギになれずに今を腐っているんです。

見た目が大きくなっただけで、本質は何も変わってない。

空を飛ぶための綺麗な羽も、身を守る為の固い殻も私には付かないんです。

そんな、不完全変態が私なんです。」

そうして、机1つ隔てて出された未来への不安の声は、しかし静寂を感じてその発言者が慌てて取り繕う事でかき消される。

「……今の詩はいかがでしたか？」

ほら、これで現代文の点数も上げてくれると

「うん、君が思ったより普通の女の子でよかったよ。」

が、流れ去りそうな少女の声を教師は掬い上げた。

「大人なんてさ、そんな大層なものじゃないよ。誰だって失敗する……って言うって聞き飽きた言葉になりそうだね。

まあ、テレビの向こうで我が国の政治家のやらかしたニュースなんでものが流れてても僕たちはこうして普通に暮らしていけるんだ。

君一人が中身は子供のまま大人になったところで世界はそんなに変わらないよ。」

「それは……、とてもつまらないですね。」

「うん、つまらないさ。」

そして、そんなつまらなくて変わり映えもしない日常を守っていくのもまた大人なんだ。

それで……、ガワだけ大きい？うん。

それっぽく見えてるのならきつと、本当の意味で君が子供では無く

なってるんだよ、もう。」

「……それでも、私は不安で、このまま大きくなった自分の体に押しつぶされてしまいそうです。」

「そっかあ……。じゃあ

パン！と手を叩く。それは彼なりの流れを切り替えるルーチンだ。

「押しつぶされちゃった時は、また小さくなつて僕と一緒に勉強し直そう。」

幸い僕はまだ若いからね。君が大人の世界に飛び立つてもしばらくはまだここにいます。

……今度は、理科の教員免許も取得して待つてあげるよ。水底に飛び込みそうなカマキリさん。」

「……ははは。それはちよつと、私にとって都合が良すぎやしませんかね？」

「都合が良くて結構。僕は“都合が良い教師”なんだ。

……あつ、ちよつ！泣かないでくれると助かるかなあ！

女子生徒泣かしたつてなるとただでさえ下降気味の僕の教師としての評価がね!?

ほ、ほら！人生ゲーム！人生ゲームやろう！」

結局、2回目の面談も人生ゲームでめられたのだった。

水奈瀬コウの月収はさらに下がった。

後編

私は毎回、国語のテストの補習を受ける。

強がりでは無く事実として、その気になれば100点だって取れるだろう。

「特に国語という科目においては間違いなく」。

そんな私に相反する状況を教えてしまった赤点先生が今日も教室にやってくる。

水奈瀬コウ。彼の授業を受けるこの時間が、私の学生生活の全てだった。

○●

「はい、という訳で『今回も』君と僕との一対一の補習な訳だけでも。

……本来は赤点を取ってるような生徒が毎回1人もいなくて、成績だけは優秀な君が赤点なのはやっぱり不思議なものだねえ？」

「いやあ、不思議な事もあるものですね。」

「君、もしかして僕を過労死させようとしてるのかい？」

補習に毎回いるのは私だけ？

ええわざとです。勿論わざとですとも。

この時間だけは邪魔されたく無いものですから、色々と裏から根回ししているのです。

「とういか結月さん。」

正直、今から何も教えずに再試しても余裕で満点取れるよね。」

「さあ？でもコウ先生の分かりやすい授業を聞けば間違いなくできる気がするんですよ。」

「僕は都合の良い先生ではありたいけど、君だけの先生になるつもりは無いんだけどな。」

その言葉に胸が一瞬ちくりと痛みますが、大丈夫。

私はこの時間が幸せなんです。

一定の速度で鳴るチャークの音も、開かれ続けてちよつと痛んだ紙の匂いも、そして、間近で私の為だけにあつらわれた彼の声も。

私の願いは叶うことが無いだろう氷砂糖のような時間の中で、それ

でもそんな薄い砂糖水に混ぜとっているのが堪らなく愛おしい。

「結月さん。真面目に聞いているのは良いんですが、せめて教科書は開きませんかね。」

「大丈夫です一字一句覚えてるので。」

「僕もう補習やめていいかなあ……？」

「もう一回赤点取っちゃおうかなあ。」

「年頃の女の子怖い。」

ため息一つと笑い声一つ。うん、いつも通りです。

……自然と黒板に向き直る先生の後ろ姿を見てしまう。

細身ながらも男性的ながっしりとした肩。教室で運動部の男子たちはいつも見ているのに、先生のそれは誰よりも大きく見えて、この人の一歩後ろを歩く女になりたいなという、私にしては珍しく乙女な想像までしてしまう。

3ヶ月に一度の特別な二人きりの教室が、1限とは言わずにずっと続けばいいのになと思ってしまう。

「では結月さん。拾遺和歌集からです。これを読んでください」

「拾遺和歌集……ですか？確か教科書には無かったと記憶してますが。」

「ええ、この学校の教科書には載って無いです。」

だから教科書を全て覚えてしまった結月さんは別のものを学んでおいた方が良くと思ったんですよ。」

「なるほど。やっぱり気が利く良い先生ですね！」

「……………」

いつもはどんな言葉にも答えを返してくれる彼が返答しなかったのに若干の疑問を覚えつつも、私は先生がチョークでいくつか綴った黒板を見た。

そして先生がチョークで指している場所の、その内容に固まってしまおう。

「……………」

「どうしましたか？結月さん。貴女が読んでください。」

「……………はい。分かりました。」

そして意を決する。

私にとって、この人の前で詠むそれは、あまりにも特別すぎて残酷すぎる意味を持っていたからだ。

「……嘆きつつ ひとり寝る夜の 明くる間は いかにかに久しき ものとかは知る」

「はい、よく出来ました。」

では、意味は答えられるかな？」

「……。」

「答えられるか、答えられないかでお願いします。」

「……か、悲しみを嘆きながら孤独に寝ている夜が、明けるまでにどれだけ長いのかを、あなたは知っているでしょうか。……いえ、知らないでしょう。」

「お見事。 正解だね。」

これは……夫が別の妻のところへ行ってしまったから送ったときれる嫉妬や皮肉を込めた和歌です。

恐らく、先生はこの情景に意味を持たせたのではなく…… 『嫉妬や孤独感と言った『相手へのマイナスのイメージ』』の和歌を 『私に』 言わせたことに意味がある……んだと……思い……ます。

「……あくまでも、『大人のせい』にして良い……ってことですか？」

「……あー、いや……うん。」

『よく分からない』かな。」

「……っ！」

思わず机を叩きそうになった手を寸前で止める。

これは、私が勝手に叶いもしない、叶ってはいけない感情を持ってしまったことが原因。

だから、悪いのは私です。

それを察して、事前に、もしものことがあつて事が大きくなるのを未然に防いでくれた先生の事を悪く言える道理はありません。

でも……いえ、だから。

私は 『中途半端に頭が良かった自分を』恨みます。

この気持ちに、この歌に気づいてしまった自分を、ずっとずっと恨

みます。

「……ッ、し……礼します……ッ。」

そして、私は教室から逃げ出してしまった。

涙を見せないように、ちよつとのしよっぱい青春の煌めきを廊下に隠しに行くために。

「……女子生徒をまた泣かせたんじゃ、教師失格だな。」

○●

テスト明け……それも期末テスト明けなもので、教師というのは夜も学校に拘束されていた。

生徒達がぶつけた知識を採点するというのは烏滸がましい事ではないかと思いつつも、そうすることで自分は食っていけるのだとエナジードリンクと一緒に喉から出かかった悪態を流し込む。

「コウ先生え〜。」

「うわっ、酒臭ッ！」

公務員が職場で飲酒しないでくださいよ……。」

採点中のコウに絡んできたのは同僚の職員だった。

彼女は生徒たちの前では真面目な装いこそしてるが、逆に見てない場所ではそれはもう別人のように弛み切ること職員たちから有名だった。

「恋バナしましょうよ恋バナア〜。」

「はいはい。後でしましょうね。」

「え〜〜！ケチい〜！」

じゃあ一つだけ！一つだけでとりあえずオナシヤス！」

「……本当に一つだけですよ。」

「ツシヤア！愛してるぜコウ先生エ！」

酔っ払いの一つだけが一つで終わった事例など宇宙を隈なく探しても見つかるかどうか怪しいが、やや諦めつつも、しかし採点しながらコウは話を聞いていく。

「初恋の味ってエ〜、どんな味だと思いますかあ〜？」

「……………れも」あつ、レモンとかチョコレートとかつまらないのは無しで。」……………」

エナジードリンクをキメて活性化させた頭を酔っ払いの対応に使わされるのはなんとも不憫な光景だった。

「魚ですかね。」

「魚ア？」

ので、あまり考えるのも面倒なので本心を言う。

「最初は美味しい美味しいって身の部分を食べ進めていくんです。

でも、そうしていくうちに苦い頭と内臓が残るんです。

そして、そんな苦い部分を頑張って飲み込んでも、骨は噛み砕けない。

……………後味が悪いんです。

初恋がいつまでも記憶に残ってるのはいつまでも尾を引いてるからなんですよ。

結婚出来るのは、お互いの悪いところも噛み砕けるパートナーですからね。」

「ポエマーだねえ。国語の教師かな？」

「国語の教師ですが？」

……………まあ、そうやって苦い部分を飲み込んで、大人になっていくんじゃないですかね。

これで満足ですか？」

「うん！天才ポエマーコウくんアリガト！」

「はっ倒しますよっ！」

そうやって千鳥足……………千鳥足か？なんか足が全く浮かないスキップみたいな変態挙動をして酔っ払いは去っていった。

こうして宇宙に新しい1ページが刻まれた……………。

「……………僕は、君だけの教師じゃ無いけれど。」

人が周りからいなくなった後、ポツリと呟く。

「都合の良い教師だからなあ。僕自身にとっても。」

そうやって、補習の時間に黒板に書いた和歌の数々を思い出す。

具体的には、彼女に読ませるために指したチヨークの真反対に書かれた、拾遺和歌集のものですらない、本当に都合良くそこに混ぜた歌を。

かくばかり恋ひつつあらずは高山の
磐根し枕きて死なましものを